

♪ **パルティータ 第3番 ホ長調 BWV1006** **J.S. バッハ**
プレリュード
ロンド風ガボット
メヌエット
ブーレ
ジーク

♪ **きらきら星変奏曲** **W.A. モーツァルト**
織田英子 編曲

*Viva la música !
Maderas que cantan*

♪ **プルチネルラ** **I. ストラビンスキー**
序曲 **織田英子 編曲**
セレナータ
タランテラ
ガボット
メヌエットとフィナーレ

*Viva la música !
Maderas que cantan*

————— 休 憩 —————

♪ **エルチョクロ** **A.G. ビヨルド**
カチート **C. ベラスケス**
ティコティコ **Z. アブレウ**
野田雅巳 編曲

*¡ Viva la música !
Maderas que cantan*

♪ **バルダリート** **A. ピアソラ**
フエノスアイレスの秋 **野田雅巳 編曲**
オブリヴィオン
天使の死

使用楽器：ミスノコンサートグラントマリimba

2001年3月31日(土) 3:00PM カピオホール

マリimba：明瀬 由武 ピアノ：高瀬 奈美

作・編曲：織田 英子 野田 雅巳

😊 ごあいさつ 😊

明瀬 由武

本日はお忙しいところをご来場くださりまして、誠にありがとうございます。私が子どもの頃から奏いてきたマリimbaをみなさまに聴いていただけますことを、大変幸せに思っております。

マリimbaの演奏会というと、難解な現代作品が多いのですが、私は、多くの方々にマリimbaの魅力を知っていただきたいと願って、親しみやすい曲を中心に演奏活動を続けております。

今日は、みなさまにおなじみの織田英子さんと新進気鋭の野田雅巳さんのアレンジ作品でプログラムを組みました。野田さんの曲は、どれもマリimbaピスト通崎睦美さんが委嘱なさったものですが、それらを快く貸し出してくださいました。

どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

この場を借りまして、会を催すためにご協力くださったたくさんの方々に心よりお礼申し上げます。

編曲者から

作曲家：織田 英子

明瀬さんからの最初の依頼は、彼の結婚式のBGMに、コスタリカの民謡を編曲することでした。そして、今年でちょうど20年になります。

今までに、明瀬さんのリサイタルのために「楽しい小品集」や2台のマリンバのための「レインボックス」などなど、数多くの作・編曲をしてきました。また、毎年クリスマスに教会で演奏するための曲もたくさんたまり、98年にはCD「マリンバの贈り物」となってリリースされ、たくさんの方々に聴いていただいています。

アレンジする曲目に関しては、いつも明瀬さんと相談してやりたい曲を出し合い決定していくのですが、私の場合、この「やりたい曲」がもう山のように積み上げられていて、家事、子育てや、他からの委嘱の仕事との狭間で明瀬さんにはいつも迷惑のかけっぱなしの、トホホの状態なのです。

さて、今回の「きらきら星変奏曲」は、最初、あの「ドドソソラソ・・・」のテーマを使ったまったく新しいものをと意気込んでいましたが、考えるほどに、彼がやろうとしているパフォーマンスの趣旨にそぐわないものになりそうな気配になってきたので、元に戻って、聴いてくださる方誰もが「あ、あの曲」と思われるよう、原曲のピアノ曲の品格をそこねないように編曲してみたつもりです。「プルチネルラ」の方が、そういう意味ではまだ現代の曲なので好きなようにできる、と思って始めたのですが、これまたストラビンスキーの強い個性のにじみ出た和音を、私の好みに変えてしまうと凡庸なものになってしまうので、音の重ね方一つにもあまり自己中心的にならないように気をつけなくてはなりませんでした。

それから、10年間明瀬さんの演奏を支えていらしたピアノの高瀬さんについて。彼女は一つの曲を弾くときに、まずいくつもの版の楽譜を調べたり、何人もの演奏をCDで聴いたりする大変勉強熱心な、「頼りになる生き字引」の方です。私としては「いいかげんなことはできないゾ」という気持ちになります。

話題を代えて——私たちの学生時代、マリンバというと現代音楽での活躍が主流で、その最先端で弾くことが多かった明瀬さんが、コスタリカに行って、民衆が生活する中で音楽を楽しんでいる姿を見て、ご自分の音楽の方向を見直したという話を伺ったことがあります。

私の曲をよく取り上げて下さる理由もそこら辺にあるのかもしれない。

作曲家：野田 雅巳

ホントに申し訳ないのだけれど、私がピアソラの作品について知っていることは少ない。「ブエノスアイレスの秋」が四季4部作のひとつであるということ、「天使の死」がバレエのために書かれた天使シリーズのひとつであること。「バルダリート」がピアソラ五重奏団のヴァイオリン奏者 E. バルダローの追憶として書かれたこと、これら3作がピアソラ自身のグループで演奏するために書かれたのに対して「オブリヴィオン」は映画のための音楽で、バンドネオンと弦楽合奏で演奏されるということ、他の3曲はラテンの古典的名曲らしいということくらい。すみません。

別にグチるわけではないのだけれど、ピアソラ作品の編曲には一種独特の苦勞がある。ヒトコトで言うなら「血抜き」のむつかしさだ、なんて意味フメイですね。「血抜き」とは、演奏者が作品に自分自身の血を通わすことができるように、原曲からいったんタンゴの血を抜くこと。つまりピアソラたちタンゴ・ミュージシャンのそれぞれ1度きりの演奏力、即興性が欠かせない作品を、非タンゴ・ミュージシャンが楽譜を通して演奏しても魅力ある音楽——原曲とは違った価値のある音楽になるように編曲することだ。その血の抜き方、抜き具合のむつかしさ。

これまた申し訳ないのだけれど、私はマリンバは勿論のことピアノも殆ど弾けない。その技術に対する無知ゆえか、私の書いたピアノ・パートはとても弾きにくかったりするらしい。おまけにマリンバとは完全に対等な役割を担っているのに、ピアニストは苦勞されているようだ。また、マリンバ・パートを書くのにピアノの発想は全く通じない。私のこの楽器に対する知識は、すべてマリンバ奏者通崎睦美の演奏や助言によって得たものだ。今日演奏される作品は、1994年から98年にかけて彼女のために編曲したもののばかりだ。

ホントにうれしいハナシ、通崎さんのCDを聴いた明瀬由武さんが、私に連絡をくださった。明瀬さんはプログラム用の顔写真を返送する封筒だけでなく、写真をはさむ厚紙まで同封するヒトだ。私のカドのある編曲が彼の手で気配りのきいたあたたかい音楽になるのか、それとも明瀬さんの日常とは全く違うカオを見ることができなのか、たのしみだ。